

司馬

shiba ryotaro

遼太郎

NHK 街道をゆく プロジェクト

の風景
5

NHKスペシャル
オランダ紀行



司馬

shiba ryotaro

遼太郎

NHK 街道をゆく プロジェクト

の風景 ⑤

NHKスペシャル
オランダ紀行

江苏工业学院图书馆
藏书章

●執筆者

NHK「街道をゆく」プロジェクト

辻 泰明(番組制作局 教養番組部ディレクター)

司馬遼太郎の風景

⑤ NHK スペシャル「オランダ紀行」

1998年12月25日 第1刷発行

著者 | NHK「街道をゆく」プロジェクト

発行者 | 安藤龍男

発行所 | 日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41-1
電話 03-3780-3318(編集) 03-3780-3339(営業)
振替 00110-1-49701

印刷 | 日本写真印刷

製本 | 石津製本

☐日本複写権センター委託出版物

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。
落丁、乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©1998 NHK, Printed in Japan. ISBN4-14-080402-5 C0395

司馬遼太郎の風景⑤NHKスペシャル「オランダ紀行」

司馬遼太郎の風景⑤

目次

ブック・デザイン

蟹江征治

プロローグ

「猿とチューリップ」の絵物語……………7

I 西方よりの光 日本に残るオランダの痕跡をたどる旅……………11

貿易風の吹きわたる島（平戸）……………13

暗箱に射した光（長崎）……………33

II 光の源へ 十七世紀オランダ黄金時代の旅……………47

風車がつくった国（キンデルダイク）……………49

市民社会の聖地（ライデン）……………66

絵の中の市民たち（ホールン）……………95

海に生きた人びと（アムステルダム）……………120

Ⅲ 常に将来を オランダの歴史から日本の未来を考える旅 137

チューリップのバブル（ハーレム） 139

市民社会成立の条件（アントワープ） 161

国土とは（締め切り堤防） 181

エピソード

司馬さんのオランダへの手紙 200

あとがき 204

引用文献ほか 206

「猿とチューリップ」の絵物語

一枚の絵がある。

縦三〇センチ、横五〇センチほどのもので、それほど大きくはない。だが、この四角い小宇宙の中には、人間の欲望の醜さと愚かしさが凝縮して描き込まれている。画面の中央で踊っているのは猿である。猿の一方の手にはチューリップが、もう一方の手には金貨の袋が握られている。

これは、十七世紀のオランダに起きた、チューリップ・バブルという狂騒を猿の姿になぞらえて風刺した絵画なのである（二五二―二五三頁参照）。チューリップの儲け話に群がった人々は、さまざまな悪事にふけり、やがてバブルの崩壊とともに破滅していく。

ここに描かれた光景は、四百年前の異国のものではあるが、現代日本の世相とあまりにも似通っているといえないだろうか。チューリップを土地や株に置き換えれば、金儲けに目がくらんで政治・経済・社会がめちやくちやになった一九八〇年代以降の、この国の有様に瓜二つである。十七世紀のオランダに起きたことが、まさしく今の日本で起こりつつあるといえるだろう。

作家・司馬遼太郎さんが、『街道をゆく』の取材でオランダに旅立ったのは、一九八九（平成元）年のことである。

当時、日本はいわゆるバブル経済の渦中にあり、国中が未来永劫続くかのような繁栄の夢に浮か

れていた。だが司馬さんは、今この時代こそ、日本はオランダから学ぶべきだと言い続けていた。それから十年近い月日が経った。

日本は、享楽の夢破れて、膨大な不良債権を抱え、「第二の敗戦」とも「国家存亡の危機」ともいわれる事態に直面している。今日のこの状況を、司馬さんはおそらく予見していたに違いない。

「日本は、江戸時代にオランダから多くのことを学びました」と、司馬さんは言う。

江戸時代の鎖国体制の下にあつては、長崎・出島に置かれたオランダ商館だけが、西洋文明との唯一の接点だった。この商館を日本に設置した十七世紀前半は、オランダの黄金時代だった。

この時期、オランダ人は「船を造ってはるかな外洋に出かけ、地球のはるかな他の地域から貨財を買ってきてヨーロッパで売り、富をなした」と、司馬さんは「オランダ紀行」の中で書いている。商業と貿易によって国が栄えたという点では、第二次世界大戦後の日本に似ているともいえる。「富んだということが、ある時期まで、他国民に気に入られなかった」という点もそうである。

そして、オランダは経済大国として頂点を極めながら、「カネがカネを生むという金融のほうに浮かれ、製造業をおろそかにしはじめたために」衰弱し、「カネがすべてであったために、政治家がまっさきにひどく」なつて、「汚職は、当然のようにおこなわれ」、やがてチューリップのバブルと呼ばれる投機が起こつて、多くの破産者を出す。この経緯も現代の日本に酷似している。

ところが、オランダは、いつしかその没落から立ち直り、現在は「ガラスでつくられた家のように透きとおっていて」と司馬さんが評する、豊かで健全な市民国家になっている。

おそらく、「今、日本がオランダから学ぶべきこと」には、二つの時間相があるのだろう。一つは、過去のオランダ黄金時代の善悪両面の歴史を知ることによって、今日の日本への示唆を得ること。

もう一つは、現在のオランダの人々の姿から、日本に真に暮らしやすい市民社会を成立させるためのヒントを探ること。過去と現在のこの二つの時間相はオランダという土壌の上に、分かちがたく堆積している。私たちは、そのどちらかを単独に取り出して、抽象的な論議にふけることは避けなければならない。

その土地に暮らしを営む人々のなかに分け入り、過去と現在を自在に行き来しながら、旅を続けていくこと。そして、その旅が、いつしか未来への道標をかいま見せてくれるものとなること。それが、『街道をゆく』で、司馬さんが実践して見せてくれた方法だったからである。

司馬さんの旅は、長崎・出島を通じて流入したオランダからの文明の光とでもいうべきものが、江戸時代の日本に与えた影響を、もう一度思い起こすことから始まっている。私たちもまた、そこから旅を始めたい。この島国の西方の浦々を巡りつつ、現代の日本の姿をもう一度見つめ直し、司馬さんが考えていたオランダ像に少しずつ近づいていくことにしたい。

目指す先はまず、かつて南蛮（スペイン、ポルトガル）・紅毛（オランダ）の帆船がたむろした、平戸・長崎の海である。



西方よりの光

日本に残るオランダの痕跡をたどる旅

貿易風の吹きわたる島（平戸）

旅立ちは一枚の地図から

バスを待つ間に、一枚の地図を買った。長崎空港の停留所には、二、三人の人影しかない。ほどなくして佐世保行きのリムジンバスが現れた。乗客の数に比して気の毒なほど車体大きい。座席に腰を落ち着けて、長崎県地図を取り出す。それを待っていたかのように、バスは巨体を震わせて動き出した。折り畳まれた地図の襞を開くと、かつて肥前と呼ばれた国の入り組んだ海岸線が姿を現した。

地図を広げることから旅を始めたのは、司馬さんのやり方にあやかっていたことである。

私の昔からの癖だが、地図の中で肥前の島々や浦々をたどっていると、にわかに貿易風の吹きわたるにおいを感じてしまう。さらにはそれらの地図が、単なる日本地図というよりも、世界史の色彩に重ね染めされているようにも感じられるのである。

〔肥前の諸街道〕『街道をゆく11』

司馬さんがたどった道を再びたどり直す旅。その最初の目的地は平戸である。平戸へは長崎から

江戸日本の鎖国のあいだ、

幕府は長崎港において清国しんとオランダとのみ貿易をおこなってきた。

鎖国された日本社会を一個の暗箱あんばうとすれば、

針で突いたような穴がいれば長崎であり、

外光がかすかに射しこんでいて、

それがオランダだった。

〔オランダ紀行』街道をゆく35〕